

2018年度・共通論題企画「アイデンティティと政党政治」

企画委員長：上神貴佳（岡山大学）

世界各地で、人種や宗教、性別といったアイデンティティをめぐる政治が顕在化している。アメリカでのトランプ現象は言うに及ばず、ヨーロッパの国々でも難民問題などを契機とする選挙での既存政党の敗北と極右政党の進出を経験している。アジア、たとえばインドでは、国民会議派による利益包括体制が崩壊し、ヒンズー至上主義政党が政権を担っている。

上記のような現象を「ポピュリズム」として捉えることも可能であるが、ここでは政治のスタイルというより、むしろ内容に着目する。アイデンティティの衝突と政党政治による仲裁の可能性を中心に考えていきたい。

具体的には、次のような問いを提起する。どのような要因がアイデンティティ政治の台頭をもたらしたのであろうか。アイデンティティ政治の台頭は、政党政治にどのような影響を及ぼしているのであろうか。世界の様々な地域におけるアイデンティティ政治と政党政治の関係は、どのように異なる（あるいは共通する）のであろうか。今年度の共通論題では、本学会を創成期から牽引してきた研究者をお迎えし、これらの問いを考えていきたい。

| | | |
|----|--------------|-----------|
| 司会 | 上神貴佳（岡山大学） | |
| 報告 | 久保文明（東京大学） | アメリカ |
| | 竹中千春（立教大学） | アジア、インド |
| | 平島健司（東京大学） | ヨーロッパ、ドイツ |
| 討論 | 粕谷祐子（慶應義塾大学） | |
| | 日野愛郎（早稲田大学） | |

分科会企画「東欧と西欧におけるポピュリスト（急進）右翼政党」

企画委員：藤嶋亮（國學院大學）

近年ポピュリズムは最も注目を集めている政治現象・研究分野の一つであるが、東欧の事例が（とりわけ他地域との比較の視座から）本格的に検討されることは相対的に少ない。しかし、現在のハンガリーやポーランドの事例に限らず、1989年の体制転換以来、バルカンも含めて数多くのポピュリスト右翼政党が出現しており、とりわけ2000年代以降は、西欧諸国とも一定程度その（ポピュリズム流行の）文脈を共有していると考えられる。

また、ポピュリスト右翼政党は、最も成功した新興の政党ファミリーと捉えられるが、「ポピュリスト右翼（populist right）」、「ポピュリスト急進右翼（populist radical right）」、「右翼ポピュリスト（right-wing populist）」、「急進右翼（radical right）」、「ナショナル・ポピュリズム（national populism）」、「極右（far right/extreme right）」など様々な名称で呼ばれ・分類されるように、その輪郭／境界線や内実は依然としてあまり明瞭ではない。

したがって本分科会では、第一に、研究蓄積が豊富な西欧の事例と比較することで、西欧と東欧の右翼ポピュリスト政党の政策（争点）・イデオロギー・支持層の異同などについて検討を加える。第二に、ポピュリスト右翼が相対的に強いポーランドと相対的に弱いチェコの事例を比較することで、東欧におけるポピュリスト右翼の強度を左右する条件について考察する。第三に、西欧を中心とするEU諸国の体系的な比較と、東欧の事例についての精密な分析を行うことで、右翼勢力の多様性を明らかにするとともに、「ポピュリスト（急進）右翼」という概念枠組みの有効性や、この概念を用いた比較研究の今後の方向性について検討を試みたい。

- 司会 藤嶋亮（國學院大學）
報告 古賀光生（中央大学） 西欧
加藤久子（國學院大學） ポーランド
中根一貴（大東文化大学） チェコ
討論 山崎望（駒澤大学）
藤嶋亮（國學院大學）

分科会企画「経済低迷時の比較政治経済—選好・戦略・政策決定」

企画委員：ケネス・盛・マッケルウェイン（東京大学）

リーマンショック以降、多くの先進国はデフレスパイラルや政府破産リスク(risk of government bankruptcy)など、新たな政策課題に直面している。過去に成功した反循環的財政支出(counter-cyclical fiscal spending)やゼロ金利政策も、期待されていたよりも効果が薄い。革新的な手段として取り組まれている非伝統的金融政策、特にマイナス金利や量的金融緩和政策、はある一定の結果を残すも長期的景気回復には至っていない。また、長期的成長に必要とされている労働市場やコーポレート・ガバナンスの構造改革も、様々な利益団体の反対で実施することが困難である。

この分科会では、これらの経済課題を1) 国民がどのように認識しているのか、2) どのように政府が政策を立案・実施しているのか、3) 多国間のコーディネーションが改革を実施する上でどのような役割を果たしているのかを探る。似たようなテーマを異なる視点から分析・報告することによって、比較政治経済学研究の新しいアプローチを模索することができるだろう。

司会 ケネス・盛・マッケルウェイン（東京大学）

報告 松本朋子（名古屋大学）・加藤淳子（東京大学） 有権者の経済政策認識—国際世
論調査実験

竹中治堅（政策研究大学院大学） 内閣官房主導の政策決定—日本

神江沙蘭（関西大学） 金融政策の多国間合意—ヨーロッパ・EU

討論 グレゴリー・ノーブル（東京大学）

分科会企画「比較政治学における混合研究法」

企画委員：三上了（愛媛大学）

日本の比較政治学界において計量分析が異端であった時代は去り、選挙研究以外でもマクロレベル、マイクロレベルを問わず、統計分析が行われることはもはや珍しくない。同時に、量的アプローチの有効性とともにもその限界も適正に判断されており、質的アプローチとの相互補完の必要性は広く共有されている。

このニーズに対応するため、混合研究・調査の草創期においては、量的アプローチに特化した研究者と質的アプローチに特化した研究者が異なる視点から同一対象を分析する共同研究という形態が多くとられたが、近年、技術の進歩と相互学習の深化、そして初めから両方のアプローチの訓練を受けた新しい世代の研究者の登場により、より深く「混合」させる方法が模索されている。

また一口に「混合」といっても、マクロレベルの計量分析とケーススタディの混合、一国研究における計量分析と質的分析の混合、そしてアンケートなどの量的測定とインタビューなどの質的測定の混合があり、それぞれにおいて研究設計時の想定と、実際の測定・分析時における成功と失敗の経験が、公的・私的な情報として蓄積されつつある。

当分科会では、双方のアプローチに習熟し、かつ自ら「混合」を実践してきた研究者に、机上の方法論的空論ではなく、その具体的経験・教訓を共有してもらうことを目的とする。

司会 三上了（愛媛大学）
報告 鷺田任邦（東洋大学）
舟木律子（中央大学）
東島雅昌（東北大学）
討論 岡田勇（名古屋大学）
浜中新吾（龍谷大学）

分科会企画「政治過程におけるジェンダー・ポリティクス」

企画委員：申琪榮（お茶の水女子大学）

政治過程におけるジェンダー・ポリティクスは、比較政治学において未開拓の分野にとどまっている。しかし、一見ジェンダー中立的に思われる政治過程及び政策決定過程は決してジェンダーと無関係な領域ではない。フェミニスト政治学は、「普遍的な個人市民」を前提とする政治が「家長の男性」を暗黙の基準としており、政治そのものが「男性」の領域として性別化されていると指摘した。そのような前提は、政治過程に参加するアクターや正統な政策関心から女性やマイノリティーの視点を排除するか、非政治的なものとして周辺化する論理として働く。

近年女性やマイノリティー集団自らの要求により政治過程が脱男性化されつつあるが、それはまた、ジェンダー・イシューが女性のエンパワメントに繋がらない単なる「ジェンダー・ウォッシング gender washing」になりかねない危険性をもたらした。本分科会は、日本、イギリス、韓国を事例に、政党政治におけるジェンダー・ポリティクスを丁寧に分析し、ジェンダーはどのように政治過程に組み入れられ、どのような変化をもたらしているのかを探求する。それによって、政治分析におけるジェンダー視点の有効性もまた確認する。

司会 申琪榮（お茶の水女子大学）

報告 武田宏子（名古屋大学） イギリス労働党の変容とジェンダー

大澤貴美子（岡山大学） 女性の実質的代表の分析—保守政権下の日本を対象として

崔佳榮（京都大学） 韓国における保育政策をめぐる政治過程

討論 辻由希（東海大学）

分科会企画「「悪魔探し」の政治学」

企画委員：庄司香（学習院大学）

近年、「敵」を悪魔のように仕立て攻撃することで自らへの支持を動員しようとする政治のあり方（Politics of Demonization）が世界的に問題となっている。そこで「敵」とされる人々は、大規模な移民・難民のように既存の社会経済構造を崩しかねない脅威とみなされる存在だったり、性的マイノリティーなど社会文化的に周縁化された集団であったり、あるいは麻薬の売人や中毒患者のようにスティグマ化して国民を動員しやすいターゲットだったり、多様である。

多くの場合、政治における「悪魔探し」は人権侵害を引き起こす。フィリピンのドゥテルテ政権下で展開されてきた超法規的処刑はその代表例であろう。こうした深刻な被害をもたらす扇動的な政治が民主的政治体制のもとでもまかり通るのは、「悪魔探し」を歓迎し、あるいはそれに熱狂的に扇動される有権者がいるからである。他方で、社会運動の活性化という形で現れる市民社会の応答にも注目が集まりつつある。たとえば、イスラム教国であるマレーシアにおいても、LGBTによる社会運動の勃興がみられる。

本分科会では、リーダーシップや政党政治の角度から検討されることの多い「悪魔探し」の政治を、上記の東南アジアにおける事例と難民受け入れに対する各国有権者の態度を題材に、悪魔化される客体や扇動される大衆の視点から比較分析し、民主主義の弱点が生む危機感が社会運動の活性化につながっていく可能性についても検討したい。アフリカやアメリカの現状も踏まえて、議論する。

司会 庄司香（学習院大学）

報告 日下渉（名古屋大学） フィリピン

伊賀司（京都大学） マレーシア

尾野嘉邦（東北大学）・堀内勇作（ダートマス大学） 難民受け入れに対する有権者の態度

討論 杉木明子（神戸学院大学）